

「いじめ」に思う

— ドーナツと合唱コンクール 3/3 —

吉成 タダシ (ストーリーライター)



いろいろあったクラスだからこそ
「今日は待ちに待った文化祭だっ
た。合唱コンクールの時、トミオク
んのスピーチは大成功だったけど、
アツミちゃんの時にマイクが入らな
くて、すっごくショックだった。で
も最後に『みんなで歌おう!』って
アツミちゃんが言った。

うちのクラスは、文化祭のちよつ
と前に、仲良くなるうってことで学
活をした。でもそれが大失敗して、
アツミちゃんが帰ってしまいバラバ
ラになった気がした。

その時、私は何も言わなかった。
言えなかった。言う勇気がなかった。
アツミちゃんが帰ったのは、ヨウヘ
イクんの『殺すぞ』発言も理由だっ
たけど、その前から私みたいに、何
も言えない子も原因だった。次の朝
ほとんど来ていない状態で、スッゴ
ク嫌だった。でも徐々にみんな来て、
アツミちゃんが来たのを知らなかつ
ただけど、紙を貼りに行つてると
きに、何気なく教室を見てみたら、
アツミちゃんが廊下において、その姿
を見たとき、本当に嬉しかった。

アツミちゃんが『文化祭終わるま
で学校来ないって言ってたよ』って
アキコちゃんが言つて、ミサトちゃ
んとマユちゃんが「二人でもいなかっ
たら、合唱コンクール出ない方がい
いと思う』って言ったとき、私は「A
組に文化祭はないのかなあ」と思っ
た。せつかくの中学生生活最後の文化
祭なんだから、絶対出たかった。だ
から、アツミちゃんの姿見たとき、
嬉しくて泣きそうになった。

そして文化祭当日、全員揃つて
文化祭に出られた。一回バラバラに
なつて、その分仲良くなった気がす
る。アツミちゃんが作つてきたドー
ナツもみんな食べたし。そんな
こととかいろいろあったクラスだか
らこそ、みんなで歌えたら優勝なん
かしくてもいいと本気で思えたク
ラスだからこそ、優勝したんだと思
う。いろんなことをみんな感じて、
辛いことも乗り越えて、これからは
もっと仲良くなれたらと思う。今
もひとつになれてるけど、もつとす
き間のないひとつになりたい。」

子どもたちの可能性を信じるこ
とで、私は想像もできないくらいい
贈り物をいただきました。だから私
は今、自信をもつて子どもたちを信
じることが出来ます。そう思わせて
くれた子どもたちが、紛れもなく、
目の前に存在してきたからです。

教師にできることは…

「今日は文化祭がありました。実
は僕は、今年の文化祭はもう大失
敗かと思いました。あの事件があつ
て、もうクラスは一時バラバラになつ
てしまいました。」

しかし、文化祭の前日にアツミ
ちゃんが帰つてきて、みんなでドー
ナツを食べたとき、クラスに前よ
り強い絆がまたできたと思いまし
た。しかも、優勝できたうえに、学
校代表として郡の音楽発表会に出
られるなんて、思いもしませんでした。
た。まさしく、ジェットコースター
のような感じだったと思います。

きつとこの出来事は、ボクの一生の
思い出になると思います。」

教師に課せられる課題はたくさ
んあります。学力をつけることも
そうでしょう。でも、これから先
の長い人生を生きていくうえにおい
て、不要なものを削ぎ落とすとい
う子どもたちに何が残るのかとい
うと、「楽しかった思い出」にすぎな
いのではないかと思うのです。つま
り教師にできることは、きつと「思
い出づくり」しかないのです。

私たちを結びつけるものは…

「文化祭の合唱コンクール、優勝
できた。言葉に出せないくらいう
れしかった。感動した。なんて言う
か…、本当にいい言葉がみつからな
い。ここ数日のもめ事。私は本当に
学級崩壊だと思った。文化祭にも
出られないと思った。心配だった。
けどアツミちゃんが学校に返つてき
た。ドーナツ持つて。夜中の三時
に作つたと聞いてびっくりした。お
いしかった。本当に。それからみん
なで協力して文化祭の準備。いよ
よ当日。私は他のクラスを見て愕然
とした。歌唱力もパフォーマンスも
すごすぎる。正直優勝は無理だと
思った。負けたと思った。でも、負
けは負けなりに、大きい声で最後
を飾ろうと思つて一生懸命歌った。
「空も飛べるはず」の最後は、アド
リブで全員手を上に挙げて歌つた。
一体感があった。本当に空も飛べそ
うだった。
いろんなことがあつたけど、結果

合唱コンクール優勝という形で、3
年A組の力を証明できて良かった。
やっぱりこのクラスはやればできる
クラスなんだ!」

「いじめはいけません」「傍観して
るのはいけません」と言うだけなら
簡単です。でも、実現化していくこ
とは本当に困難です。ところが三年
A組の子たちは、実に豊かな感性と
行動力で、その困難を乗り越えて
いきました。それが、子どもたちの
もつ可能性なのだと思います。正面
突破で王道を突き進む姿を見せた
かと思うと、どうしようもない困
難にぶつかったときには、実にしな
やかに、相手のハートを掴んでいき
ました。

この年で、私は学校を変わるこ
とになりました。私にもいろんなこ
とがあつたように、子どもたちにも
いろんなことがあつたでしょう。そ
れでも友人の結婚記念にと、ヨウヘ
イはメッセージカードを持ってきま
す。アキコは、毎月私の髪をカット
してくれます。アツミは、自らが体
験した差別の現実を相談に来ます。
私たちを結びつけるものは、やはり
「思い出」なのです。

私は今でも、あのときの味を求め
てドーナツを頬ばります。でも、ど
うしても辿り着くことができません。
少し「しょっぱい」あのときの
ドーナツの味は、三年A組の記憶と
ともに、私の胸の奥の大切な場所に、
これからずっと残り続けていくの
です。